

紫式部と清少納言関係と性格の考察



(紫式部)



(清少納言)

紫式部と清少納言については殆どの方がご存じと思いますが、紫式部は、ロマンチック不倫物語「源氏物語」の著者であり、清少納言は、どこか切なさの残るほのぼのの日常エッセイ「枕草子」の著者であります。

この二人は若干のズレはあるものの、殆ど同世代の2大作家であり、それ故に「紫式部と清少納言はライバルで仲が悪かったのではないか？」と危惧される向きもありますが、それについて解る範囲で考察したいとおもいます。

さて、紫式部と清少納言の関係はどうだったのか？そして二人はどんな性格だったのか？想像してみたいと思います。それには、先ず紫式部と清少納言の政治上の置かれていた関係（背景）を知る必要があります。紫式部も清少納言も現在では歴史に残る大作家ですが、本業は女官であります。高貴な女性に仕えて、日々様々なお世話やお手伝いをする仕事でした。

※長徳の変（定子が失脚する原因となった事件）とは

単純でチョットドジな伊周（これちか）と花山法皇との色恋沙汰の話で、996年1月の出来事です。藤原伊周には夜に通って居る女性がいましたが、ある時、花山法皇（花山法皇は一条天皇の前の天皇）も同じ家に夜に通うようになりました。伊周は、花山法皇が自分の意中の女性（同じ女性かどうかは不明）の元に通っているものと勘違いして、激怒し花山法皇を襲撃、元天皇と言え、権威は絶大で流罪になるところ法皇にも後ろめたいことに、出家の身でありながら女性の元に通っており、話が公になるのは困るので、内密で処理をしたが、ただ、内々で噂が広まり、ゴシップネタとなり、結局、左遷され太宰府へと飛ばされた。このことで、最大のライバル伊周の失脚により藤原道長の時代がついに始まるきっかけを作った。

この年表で注目したいの是一条天皇に妃が二人居たことになりませんが、この異常事態を歴史上、「一帝二后」と呼ばれ、藤原道長がその権力を使って強引に一条天皇に嫁がせた結果でした。

年表を追うと、一見藤原定子と藤原彰子は一条天皇を巡って激しい争いを繰り広げた様に思われますがそうはなりません。一帝二后になった翌年に藤原定子が亡くなってしまいうからです。むしろその後、藤原彰子は定子の遺児をととても大事に育てていますから、そもそも生前から両者の仲が悪かったとは考えにくいのです。

同じく紫式部と清少納言もお互い争うことはありません。何故なら、清少納言が1001年に宮内から去り、1001年～1007年頃に紫式部が宮仕えを始めていますから、対立しようがありません。

ただ、清少納言が仕えた定子を取り巻く女官達が優秀であったため、宮内では評判がよく、その後入内した紫式部を取り巻く女官と彰子妃が地味な性格もあって、互いの面識は少なく宮内の噂に惑わされ、清少納言のことを強く意識せねばならなかった。

その後、紫式部は清少納言を「紫式部日記」で「清少納言は、得意顔甚だしい人で、賢ぶって漢字を書き散らしているけれどよく見ると、まだまだ足りないところが多い」と記しています。紫式部は父藤原為時の影響で漢字、漢学に通じていた（為時が弟に教育をするのをそばで聞いて覚えた）のでこの様な表現になったと思えますが、清少納言も当時の女性が漢字や漢学を学ぶ事は無かった状況で、可成り女官としては高学歴であり、宮内の女官や宮中の男性に

読み物として「枕草子」の人気があったことが推量出来ます。

ただ、年表でも解るように二人が「直接職場で顔を合わせ、日々すれ違っていた」とは考えにくいのです。このことから、紫式部は清少納言のことを清少納言が宮内退任後になって、可成り意識していたことがわかります。

まとめ

清少納言と紫式部性格について

紫式部については、「紫式部日記」の内容から、紫式部は兎に角負けず嫌いで真面目。定子の時代と比べられる悔しさをバネに一生懸命彰子に仕える姿が描かれています。一方で、清少納言に対しては、日記で単なる批判を越え辛辣な悪口をひたすら書いており、負けず嫌いの嫉妬心のように思われる。

紫式部は今風に言えば「負けず嫌いのキャリアウーマン。いい人なのだけれど、堅そうな人だからチョット話しかけにくい……」というような感じ。清少納言は、「負けず嫌いだけどおおらかで社交的な性格」で自分の教養や知識をフル活用して、定子やその周りの女官達を楽しませた。

清少納言の書いた「枕草子」は、自分が仕える定子の兄藤原伊周（これちか）の左遷によって定子が凋落していた頃に書かれていたにもかかわらず、その内容は泣けてくるほど明るいのです。清少納言が負けず嫌いであると同時に、強い芯を持った女性だったことがわかります。

清少納言は、今風に言えば「プライドは高いけれど、空気が読めて気の利くキャリアウーマン。集まると場を盛り上げるムードメーカー的存在」という感じ。

二人の女流大作家の経歴や環境を調べると清少納言に拘わる資料が少なく、彼女が置かれた時代背景と「枕草子」から推量出来ること以外はあまりなく、むしろ後に、紫式部が記した「紫式部日記」の記述から、少々歪曲はあるものの、清少納言の性格や様子が推察出来ます。

一方、藤原道長の支援を受けた紫式部は、彰子（道長の娘）に仕え光源氏を思いのまま動かせて、「ロマンチック不倫物語」を大変なパワーで書き上げ、後世には、高貴な家の嫁入り道具」になるほどの傑作作品となった。

ここで、この歳になって感じることは、「古典を読む」ことで、本来決して

出会うはずのない、清少納言や紫式部の声を聞くことができます。この声は原本が残っていない（写本）ことから、完全ではないにしても、長い時代を越えて残り続けた「本物の声」であることに間違いはありません。

シニア大学でご指導頂いております八木先生の「枕草子」と横山先生の「源氏物語」授業を、コロナ禍を理由に受講を控え（？）8月から授業に出席し、ごく限られた部分的な内容を知るのみで、大きなことはいえませんがこれを機会に、時空を越えて、この時代の気分になって、もう一度、「枕草子」「源氏物語」「紫式部日記」を楽しみながらユックリと熟読したい。

歴史文学部 足高 晴夫